

東アジアの和解と平和を考える

戦後日韓キリスト教の歴史を通して

徐正敏(1)

日韓関係、特にキリスト教の日韓関係においては、1967年の日本基督教団の「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(2)、いわゆる「戦責告白」が一番大事なものであり、その以前と以後の日韓キリスト教関係の歴史は異なっており、戦責告白は、これからの日韓キリスト教関係を前向きに考えるために必要なものであると思っています。

日韓関係の近代の歴史は不幸な歴史でした。同じ信仰を持つクリスチャンの間においても良くなかったのです。兄弟姉妹であるにもかかわらず、国の歴史に従い、長い間不幸な歴史でした。政治・経済・社会的な関係が不幸な歴史であっても、クリスチャンの間においては、それとは異なる特別な関係があるのではないかと思っ

えます。

もう一つ残念なことは、近代以降、日本のクリスチャンは、日本の国の宗教政策、政治的スタンスからマイノリティーで、いろいろな迫害を受け、自分の場を護ることも難しいところがあり、大部分は、もちろんそれとは別の道を歩んだクリスチャンもいますが、日本の国の政策、道を一緒に歩き、ときには更にオーバーして、日本の国家目標にクリスチャンはぜんぜん邪魔ではない、あるいは、我々がもう少し積極的に日本の近代国家の道を先頭に立ってリードしますというスタンスが見えます。

日清・日露戦後の近代日本国家の目標の第一課題は何かというと、朝鮮半島をどうするかということであったと思います。西欧の帝国主義者たちがアジア・アフリカ・ラテンアメリカを植民地として経営する時は、あまり形式的な名分とか名目とかいう主張はなく、経済的利益や政治的なメリットがどこにあるかが中心です。しかし日本はアジアの国で、アジアの国は基本的に何かを實踐するためには名分や名目が必要で、何のために朝鮮半島を植民地にするかという名分・名目が大事であったといえます。もちろん経済的・政治的権益の問題もありますが、それは別としてレトリックが必要であり、日本の様々な分野のエリートたちがそのレトリックを作った時、もつともハイレベルなレトリックを作ったのはクリスチャングループでした。

そのレトリックには、例えば朝鮮半島は何千年間も中国の植民地状態であったから、中国から朝鮮半島が独立できるようにな力を、我々が植民地経営をして作ってあげなくてはならない。あるいは西欧の国々がアジアに対して侵略しようとしている流れがあるの

で、アジアで一番強い国の日本が、朝鮮半島を含めアジアを西欧の国々から護り平和を誘致しなくてはならない等がありました。これらは普通のエリートたちが考える政治的なものであり、この時代の価値観でした。

しかし、政治家たちがなるほど思ったものに、クリスチャンの一部の者のレトリックがありました。それは、我々の信仰、我々の聖書解釈からいえば、神様が何千年前から朝鮮半島は日本のものであると約束しており、朝鮮半島は日本人にとってはカナンで、ユダヤ人にとつてのパレスチナと同じであり、神様から我々が朝鮮半島を経営しなくてはならないし、我々が朝鮮半島に新しい国を作るのは神の摂理である、というものでした。それを讀んだ政治家たちは、このクリスチャンたちの日韓併合に関するレトリックは、他のものとはレベルが違ふものであると喜んだのです。もちろん、それだけが日韓併合の理由ではないのですが、これ以降、クリスチャンは重要なグループであると認定され、1912年文部省は神道、仏教、キリスト教が同レベルの重要な宗教であるという、いわゆる「三教合同」としました。そして三教の代表たちを集めて、この国の未来を宜しく願ひますということになり、当時のクリスチャンの代表は天皇陛下の恵みによってこうなることができたことと喜んだのです。

それを含めて、3・1独立運動(1919年)の時代、1930年代以降激しくなつた朝鮮半島のクリスチャンに対する神社参拝の強制、神社参拝強制だけではなく、天皇制イデオロギーを国家的な宗教にして、天皇崇拜を朝鮮半島のクリスチャンだけではなく全民衆に強制する中、残念ながらその一番先頭に立つて強制

私の母校である延世大学の教育者として最も有名なペク・ナクジュン(白樂濬)先生は神社参拝をし、朝鮮の青年たちに日本軍に参加し天皇の恵みを受け入れて頑張るようにと勧めました。梨花女子大学の代表的な人物であるギム・フアン(金活蘭)先生も同様でした。韓国のクリスチャンの多くは、自分達は被害者であるというアイデンティティーを持っていますが、実は加害者であり、当時の朝鮮半島の弱い民衆たち、若者たちにどのような影響を与え、戦争の犠牲者にして行つたかについて反省していません。

戦後の日韓キリスト教関係も良くなかつたのは、韓国側からいえば、日本のクリスチャンは加害者、自分達は被害者と区分していたことにあり、その区分は歴史に対する反省のスタンスがないということなのです。韓国で最初にクリスチャンとしての自分達の罪を告白したのは、2007年の韓国基督教長老会の罪責告白宣言(4)です。私はその告白文のアドバイザーの一人でした。

1967年3月26日が、日韓キリスト教関係が新しい時代がスタートする一番大事な時ですが、1945年以降から1960年代までの日本のキリスト教は内部の様々なことを整理し、内部的アイデンティティーの確立が最も重要な課題で、歴史認識の変更などは殆どなされませんでした。1946年、日本基督教団が新日本建設についての宣言(5)を出しますが、いろいろな良い面も書かれています。1945年以前のキリスト教の文書には「戦争の福音」とか「聖戦」とかいう語句がいっぱい出て来ますが、その1年後のこの文章には「平和の福音」が最初に登場します。し

をしたグループが日本のキリスト教グループでありました。

ソウルの中心にあるナムサン(南山)の朝鮮神宮には朝鮮人誰もが参拝しなくてはならなく、キリスト教学校の学生たちもそうしなくてはならなかつたのです。朝鮮半島のクリスチャンの中には神社参拝強制に最後まで拒否して殉教していく人もいました。その代表的な人物はチュ・ギチョル(朱基徹)牧師です。

このような強制をリードしたのが、富田満を始めとする日本のクリスチャンでした。私が勤めている明治学院大学の出身者が、富田満を含めて一番先頭でリードしたのです。1995年、明治学院はその罪に対して、その先輩たちの名前を呼びながら告白しました(6)。

このような日韓キリスト教関係を考える時、日本のクリスチャンは、部分的に素晴らしい方もいましたが、韓国の歩みに対して、あるいは韓国のクリスチャンに対して、全体としてはいいことをしてはなかつたといえます。戦前だけではなく、1967年以前は、戦後もそのままネガティブな関係が続いていたといえます。

しかし、私の韓国のキリスト教に対する批判の一つは、韓国のクリスチャンたちは今もそうですが、自分達はずっと被害者として受難を受けてきた者であるというアイデンティティーを語ることでです。受難したクリスチャンは5〜10%以内でしかなく、大部分のクリスチャンたちは日本のクリスチャンたちと同じように積極的に神社参拝を行い、天皇崇拜をしていたのです。当時の朝鮮のクリスチャン指導者の大部分は、いわゆる親日派であり、積極的に日本に協力したのです。

しかし、「戦争の福音」から「平和の福音」へとなぜ変更したのかという説明は全くありません。従って1946年の文章は、歴史の視点からみれば意味のない文章としか言えないです。

1965年9月、日本基督教団の大村勇議長を始め数人の代表団が韓国基督教長老会の総会を訪問しました。韓国基督教長老会は韓国内ではリベラルな教団です。余談ですが、韓国では基督教長老会・イエス教長老会、基督教監理教会・イエス教監理教会と、どういふわけか「キリスト」と「イエス」が分離、離婚しているのはおかしいと私は良く言うのです。それはともあれ1965年は、いろいろ批判はありますが、2月に日韓両国が正式に相互を認めることになつた日韓条約が結ばれた年です。それを受けて正式な韓国のビザをとつて訪問し、歴史的な罪を告白し謝罪したいとの訪韓でした。基督教長老会総会ではこの日本基督教団代表団を正式に受け入れて、総会の中で訪問団の言葉を聞くかどうかについて3時間、4時間もの議論となりました。正式に受け入れて彼らの告白を聞けば和解のプロセスが出てくるという意見もありましたが、しかしまだまだ許せない、受け入れる心の準備が出来ていないという意見も多くあり、とても激しい議論がなされました。代表団と通訳および案内役であった在日大韓川崎教会のイ・インハ(李仁夏)牧師は、その間、隣の部屋ですつと待っていたそうです。総会では絶対まだ許せないという雰囲気であつたところから、総会終了直前、地方の小さな教会の牧師が発言を求め、マイクを持ってずつと泣きながら、今、日本からの代表団を受け入れられないならば我々はクリスチャンではない。イエスの弟子などと

恥ずかしくて言えない。もしこのまま閉会して帰るならば我々はクリスチャンではなくなるがそれでも良いのですか、と話したのです。この言葉で総会の雰囲気完全に変化し、受け入れることになりました。イ牧師に聞いたことですが、大村議長たちも言葉が上手く出ず、また罪の告白をしようかという雰囲気ではなく、ただ一緒に泣くということであったということ。そして韓国基督教長老会では、この時から日韓の教会関係を正常化する準備が始まったのです。

大村議長たちが韓国から帰った後、日本基督教団の内部では激しい葛藤が生じました。「戦責告白」をなせなくてはならないのか。そのような文書を発表する理由はどこにあるのか。アジアの中で、戦争の中で、日韓の中で、我々はメインではなく、むしろ被害者であり、どのような重要な役割をしたのか。国が間違った道を歩んだことは確かかもしれないが、キリスト教の力がどれほどのものであったのか。それなのにわざわざ歴史的な罪を告白しなくてはならないのか。このように、我々もマイノリティーであり被害者であったのだという意識が日本基督教団の中にあつたのです。その他にも様々な意見があり、結果的には教団の正式な告白文書として発表することが出来ず、鈴木正久教団議長の個人名の文章として発表することは認めるということになりました。

そのために教会史家たちの中には、韓国でもそうですが、教団としてではなく個人の文章である「戦責告白」をあまり高く評価しない意見もかなりあります。しかし私はそれに全く反対で、この文書を高く評価します。それは歴史の中で、満場一致というのは嘘で、どのようなものでも満場一致というのは何らかのプレッ

シャーがある時だけです。いろいろな意見があるのが本当の歴史です。もしこの「戦責告白」が、イースターに出された文章ですが、満場一致で出されたものであるならば、それは嘘であると私は判断したと思います。

先ほど触れた1995年に出された明治学院の戦責告白は、教団戦責告白よりはもう少し積極的な内容になっています。けれどもこれも同じく、明治学院の理事会・教授会、後には学生会でも論争があり、例えば他のキリスト教主義大学が発表しないのに、なぜ明治学院がこのような文書をわざわざ発表しなくてはならないのか。我々になんの罪がそんなにあるのか。我々も被害者ではないかという意見が半分以上あつたといえます。そしていろいろなプロセスの後、教団と全く同じように、中山弘正学院長個人の名前で発表することになりました。余談ですが、私は韓国の学生たちに、延世大学教授を辞めて明治学院大学の教授になつたのはこの告白があるからであり、そして日本で最高レベルの大学は明治学院大学であると話します。入試レベルが高いとかいう事ではなく、このような歴史認識を持つている大学だからです。

1967年「戦責告白」が発表されたことから、日本のクリスチャン全体の雰囲気に変化がありました。これが大事なことです。公式文書なのか、議長個人の文章なのかが大事なことではなく、出された以降においての意味が重要なのである、と私は判断したのです。韓国では、このような私の意見が正しいと認識されて来ていると思います。教団がこの素晴らしい文章を発表しただけで終わっていたら、あまり意味がないのです。人間は言葉ではなん

ともいえます。言葉に基づく実践があるかどうかです。

1967年以降の日本のクリスチャンの雰囲気は、100%ではないが変化しました。2000年にわたるキリスト教の歴史の中で、一番美しかった時と一番臭かった時の区別は簡単です。教会が一番美しい香りがするのは、教会がこの世の中で最も弱いもの、涙を出しているもの、力がないもの、名譽がないものと一緒になつた時です。イエスの弟子のグループのアイデンティティーに立つたときです。逆に教会がお金のある人々、権力がある人々、力のある人々、えらい人々と一緒になる時、教会はかならず臭くなります。それはもはや教会ではないということにもなつてしまふ。簡単に言えないことではありますが、しかしあえて区別すればさういえると思います。

1967年以前の日本の教会は、なるべく国家権力、社会のメイン、社会の上のグループと一緒にするために頑張つたといえます。天皇制イデオロギーになんとか協力して、国家権力となんとか折り合いながら、エリートたちと一緒に、というのが大部分のキリスト教のやり方でした。

しかし1967年以後雰囲気が変わり、日本国内で差別を受けて苦難を受ける人々は誰かということに、大きな関心を持つようになつたのです。その第一は当時70万人、現在は40万人ですが、在日朝鮮・韓国人でした。在日朝鮮・韓国人の多くは、自分の思いとは別個に強制的に朝鮮半島から日本の各地で働かされたに連れてこられた人たちとその家族です。また「従軍慰安婦」。あるいは強制的ではなかったとしても植民地支配下の朝鮮半島では生きる道がないために密航してきた人々、特に済州島、慶尚道

の人たちが関西・九州の方に密航して来ました。密航途中で家族の3分の2は亡くなって、どうにか居ついた人々です。

戦後、彼らが自分の国に帰ることができるようになつたとき、日本人の雰囲気は「朝鮮人は朝鮮半島に帰れ」というものでした。しかし、帰る力もなく、帰つたとしてもそこでどうすれば良いか分からない、自分の生活は既に日本にあるのですから。この在日の人々に対し、とんでもない差別がなされていたのです。

「戦責告白」以降、日本の教会はこの在日の人々、そして日本国内で一貫して差別を受けてきた沖縄、被差別部落、アイヌの人々に対する特別な社会的宣教プログラムを作つたのです。もちろん一部は福音主義的な動きもありますが、全体的には社会の中で最も苦難を受けている人々と教会がなんとか一緒になつて歩もうという雰囲気が生まれたのです。そのことは日本の教会の歩む道、目標が違うものになつたのであり、「戦責告白」が今までとは全く逆、あるいは別の道をつくる切掛けになつたと積極的に言えます。先ほど言つたことでは極端かもしれませんが、1967年を境に日本のキリスト教は少し臭い道から美しい道への変更がなされたといつて良いと思います。それが1967年の歴史的意义なのです。

簡単にしか触れられませんが、朝鮮半島分断はキリスト教の分断でもありました。戦前の朝鮮半島のキリスト者の70〜80%は今の北朝鮮の地域の人たちで、南は20〜30%でした。当時、ピョンヤン(平壤)は「東洋のエルサレム」と言われたほどです。ピョンヤンの少し北にあるソンチョン(宣川)では、1930年

代には全体の50%がクリスチャンでした。しかし半島の分断と1950年6月25日の朝鮮戦争勃発によって、北朝鮮のかなり多くのクリスチャンが苦難を受け、亡くなった人もいますが、クリスチャンを含め約800万人が南に逃げたのです。今の韓国でキリスト教が強くなった第一の理由は、北から避難してきたクリスチャンがメインになったからです。ですから朝鮮戦争と半島分断は韓国のキリスト教にとって大きな影響があったのです。

朝鮮半島の南では、戦後最初のイ・スンマン(李承晩)政権から民主主義とは反対の独裁政権がずっと続き、様々な面で韓国人びとは苦しみ、人権問題がずっとありました。1961年に軍事クーデターを起こし、軍事独裁政権を作った有名なパク・チョンヒ(朴正熙)大統領、今回はこの娘がもっと有名になってしまいました。そしてパク・チョンヒ死後、更に軍事独裁政権を強化したチョン・ドファン(全斗煥)政権と続き、韓国には何十年間も民主化が全くない状態が続いたのです。私の学生時代がちょうどこの時期でした。そしてそれに抵抗する民主化運動に加わりましたので、このように私は身体に障がいがありました。学生運動に参加したことによる苦しみも受け、とんでもない時代でした。友人・先輩・後輩には3年・4年、長い人は10年以上、刑務所に囚われていた人が多くいます。軍事政権の下では、学生運動をしている者は共産主義者とされてしまい、ものすごい反共主義の中で非常に厳しかったのです。1980年の光州民主化運動では千名以上の民衆たちが韓国の正規軍によって殺されました。

今回のキャンドル革命で韓国の政権が変わったことを、日本の友人が「韓国はすごいですね。キャンドルでそれができてしまう

のですか」と言いましたので、「私たちは経験、苦難の歴史が一杯あり、これまで何千何万の民衆が亡くなった経験・歴史があつてこそ今回の事が可能になったのだ」と私は説明しました。たんにキャンドルでデモをしただけで政権交代が起こることなどはあり得ません。歴史があるのです。どのようなプロセスで韓国の民主主義が生まれたかがあるのです。

この韓国の民主主義のために軍事独裁政権と闘うとき、一番大きな役割をしたのが韓国のリベラルなクリスチャンのグループであったことを知って覚えてください。そのグループへの第一の協力者は、日本のクリスチャングループでした。私が日本に留学をするようになったのは、チ・ミョンクワン(池明観)先生の影響です。そしてパク・ヒョンギユ(朴炯圭)先生、そして民主化運動のベースとなった韓国NCCの総幹事を長くやっていらしたキム・クワンソク(金観錫)先生たちが、私たちの心の重要な基盤となった方々です。

キム・クワンソク先生の伝記が最近出版されました。それを書いた私の先輩が、資料調査の為に信濃町教会を訪ねたいということがあり、私が案内して一緒に訪ねたことがあります。キム先生は1940年代、日本神学校で勉強しながら信濃町教会の礼拝に出席していました。彼はオルガンが上手なのですが、週日には信濃町教会でオルガンの練習もしていました。その他にもムン・イクファン(文益煥)先生など、有名な韓国のクリスチャンで日本神学校で学んだ人たちのかなりの者が、信濃町教会がベースになっています(6)。

結論のようになりますが、以上のような歴史の流れがありますので、キリスト教における日韓関係は1967年以降ほとんど正常化し、日韓の様々な分野の中で一番望ましいモデルとなったのが、韓国のリベラルなクリスチャングループと日本のクリスチャングループとの間の協力関係なのです。韓国のクリスチャンリーダー達が民主化運動の中で様々な苦しみがあり、それを世界に知らせるために、その情報を秘密裏に日本に送り、それを日本で整理してアメリカ、ヨーロッパ、世界中のジャーナルや教会に発信したのです。そのネットワークを作ることを、日本のクリスチャンが担ったのです。それによって日韓キリスト教関係が本当の兄弟関係へと再建されたのです。

今日では韓国の事情も日本の事情も変わったこともあって、少しストップしているようで、あんまり活発ではないのですが、日韓キリスト教の関係が、その他の日韓関係をポジティブに変換させていく存在としてあったのです。いろいろな波があり、歴史的なポイントポイントがあったのですが、少なくとも2000年あたりまでは、日本のキリスト教、特に日本基督教団と、そして韓国のリベラルなクリスチャングループの間の協力関係は、日韓関係の未来への希望があるものでした。それは、これまで申し上げた歴史的な苦しみを基盤にして作られたものであり、それが一人一人の人間関係、個人関係、ネットワークが主要なきっかけとなり、ベースとなったのです。例えば今はアメリカにおられるチ・ミョンクワン先生の場合、この間も毎年日本にいらして、秋山さんが関係しているところや明治学院で大きなプログラムが持たれ

ています。チ先生は94歳なのに、まだまだお元気で2時間以上立ったまま講演をなさります。これは私たちにとってはとても楽しいことなのです。しかし、オ・ジェシク(吳在植)先生、パク・ヒョンギユ先生ほか多くの方々が亡くなりました。とくに残念なのは信濃町教会にも関係のある澤正彦先生です。澤先生は戦後最初の韓国への神学留学生で延世大学で学びましたが、神学だけでなくいろいろな分野を学んだ最初の方でした。そして日韓国際結婚もなりましたが、残念ながら53歳で癌で亡くなられました。私はお葬式に出ましたが涙を流しながら、日韓の歴史のいろいろな苦しみを整理する為に十字架で先に亡くなったと思いました。そして澤先生の後輩の蔵田雅彦先生も同じ歳で癌で亡くなられました。蔵田さんが延世大学で勉強していた時、私は大学院生で、その時の関係で私は日本語がほとんど出来ないにも関わらず日本に留学できたのです。

チ・ミョンクワン先生をトップとして、日韓キリスト教関係の歴史をやっている者の中では私はまだまだ子どもですが、さらに頑張っていきたいと思っております。

報告的なものにしかならなかったですが、これで今日の私の話は終わりたいと思います。

(文責・秋山眞兒)

【註】

(作成・秋山眞兒)

(1) 徐正敏(ツ・ジョンミン) 韓国に生まれる。明治学院大学教授、同大学キリスト教研究所長。延世大学、同志社大学出身。延世大学教授、韓国基督教歴史学会会長を歴任。日本語による著書『日韓キリスト教関係史研究』(日本キリスト教団出版局) 他。

(2) 「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」

(前略) わたしどもは、教団成立とそれにつづく戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、今一度改めて自覚し、主のあわれみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。(中略) 「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によつて、祖国の歩みに対し正しい批判をなすべきでありました。しかるにわたしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました。まことにわたしどもは祖国が罪を犯したとき、わたしどもは教会もまたその罪におちいりました。わたしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもつて、この罪を懺悔し、主のゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞に「ここからゆるしを請う次第であります。(後略)

一九六七年三月二六日 復活主日

日本基督教団総会議長 鈴木正久

〔全文は、『会員ハンドブック(第3版)』参照〕

とおしてより広くより深く知らされてきた私どもは、当時よりもっと全体的・客観的に事柄を見る事ができる立場におかれています。ですから、当時の指導者たちが犯していた過ちについて、むしろ私たちが主の前に告白し、人々に謝罪せざるを得ないのです。それは彼等を鞭打つためではなく、私ども自身が同種の過ちをこれから繰り返さないためなのです。

一九三一年の「満州事変」、一九三七年の「日華事変」のあと、政府は一九三九年の「宗教団体法」に基づき、四一年六月、宗教界を統合し国策に協力せしめるべく「日本基督教団」を結成させました。この教団「統理」富田満牧師は自らも伊勢神宮を参拝したり、朝鮮のキリスト者を平壤神社に参拝させたりしました(一九三八年)が、このことが朝鮮の多数のキリスト者を殉教に追いやり、戦後も日朝両キリスト者の間にうめがたい深淵を作ってしまったことは否定すべくありません。朝鮮・台湾ではこの神社参拝問題のために多くのミッションスクールは存廃の岐路に立たされたのです。この富田氏は、戦中から引き続き、戦後も、数年間にわたり明治学院の理事長でした。

また、一九三九年、明治学院院长に就任した矢野貫城氏は、宮城遙拝、靖国神社参拝、御真影の奉戴等々に大変積極的に取り組みました。同氏も主への罪の告白を公には果たさぬまま、戦後しばらく学院院长としてとどまりました。これらのごとに関し、明治学院は今日まで主の前にその罪を公に後泊し、侵略された国々の人々に謝罪をしたことがなかったのです。「飛べ日本基督教団号」という掛け声にもとで集められた戦闘機献金、また当時の機関紙『教団時報』で「殉国即殉教」が主張され天皇の国家へのキリスト者の無条件の

(3) 「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」

私は、日本国の敗戦五〇周年にあたり、明治学院が先の戦争に加担したことの罪を、主よ、何よりもあなたの前に告白し、同時に、朝鮮・中国をはじめ諸外国の人びとのまえに謝罪します。また、そのことを、戦後公にしてこなかったことの責任もあわせて告白し、謝罪します。

敗戦五〇周年を迎える今日、すぐる戦争の惨禍の実態は、消え去るどころか日を追って一層詳しく明らかにされてきています。「従軍慰安婦問題」、「七三一部隊」による生体解剖等々、未だにその傷跡は生々しく、生き残った当事者やその親族の苦難の日々は今もなお続いています。

日本国民の犯した戦争犯罪は当然諸外国の人びとも及ぶものであり、キリストの愛の名によって樹てられていた明治学院も、この日本国の中に在った限り、全くその圏外にいることは出来ませんでした。

一般的に私学は、国家権力に対し弱い立場にありました。それにもかかわらず明治学院は見学の精神である「キリスト教に基づく教育」を守ってきた輝かしい歴史をもってきましたが、かの侵略戦争に協力するという罪を犯してしまったことは、主イエス・キリストの御前に言い逃れることができない事実であります。

もとより、私ども後世の、その時代の厳しさを直接体験していない者が、戦時下の指導者たちに「石を投げる」資格はむろんないでしょうし、彼等や組織の全体を裁くことが出来るのは、唯、主なる神のみであることは言うまでもありません。しかし、戦争の惨禍を被侵略者・被抑圧者・殉教者の側からの、いよいよ増大する証言を

服従が日本基督教団の名によって勧められたとき、富田氏らもその最高責任者だったのです。当時の全体主義的風潮の厳しさ、またその重圧のもとで「主の器」としての教会組織を守らんとした指導者の苦心、といった点を考慮したとしても、それらが冒頭に述べた悲惨をもたらした日本の国家的犯罪に組み込まれていた事実は否定するべくありません。こうした状況のもとで、侵略戦争に加担させられ、学徒兵として出陣していった多くの当時の学生たちのことを想うと、教師として、学院院长として深い悲しみを覚えざるを得ないのです。また、朝鮮・台湾などからの学生たちも含みつつ多くの若者を戦地に送った当時の教師たちの苦悩の深さに思いを馳せる次第です。これらのことについて、少なくとも、「敗戦」という主の審判が下ったところで学院指導者たちの反省の告白と謝罪がなされるべきだったのではないのでしょうか。

しかしながら、戦後においても反省と謝罪がなされなかったばかりか、こうした侵略戦争で亡くなった日本の戦死者を「英霊」(ひいでた靈魂)としてまつろうとする「英霊」思想は明治学院からも消え去りはしませんでした。

明治学院の理事者、明治学院の「建学精神」を保持する主体としての理事会の中の一人である田上穰治氏が、公権力の「英霊」参拝を積極的に推奨してきたのです。それは、戦時下の富田氏らが犯していた誤りと全く同種の罪―死者を神としてあがめる「偶像崇拜」という『聖書』に自己啓示されている私どもの主なる神が最も忌み嫌うその罪―が、明治学院との関係においても戦後も引き継がれてきていた証左の一つなのです。

このように、「戦争責任」問題は、「戦後責任」の告白と直接に連

なっており、それらのことが明確にされないかぎり、今後の明治学院のゆくえは見出しがたいのです。

とはいえ、敗戦五〇周年の今日、明治学院の戦時下の歴史を振り返って、長谷川信氏のような良心的な学生がいたことに私どもは希望の光を見出します。出征せざるを得なかった長谷川氏の苦悩と「天皇の国」からの内面的自立の気概とは、イエス・キリストのみに土台を据えた明治学院の今後の歩みへの指針を示唆していると思われまふ。私は、彼のような生き方を貫こうとして悩んだ学生が少なくなかったのだと信じたいのです。

二十一世紀を展望し、建学の精神を再確認しつつ、前進しようとする明治学院は、富田・矢野両氏らをとった「広い路」ではなく当時学生であった長谷川氏の「狭い路」をこそたどらねばならないでありまふ。今、再び日本が「国際貢献」の美名のもとに海外に軍隊を派遣し始め、「殉国」(国家のために殉死すること)の思想が現代的装いをもって、じわじわと日本社会のなかに浸透していく中で、私どもはその殉難者が再び「英霊」として崇拜されることに危機を感じざるを得ないのです。私どもは先ず自らも最も身近な明治学院の戦争責任・戦後責任を深く自覚し、主キリストの前にそれを告白し、人々の前にそれを公にし、戦禍におかれた国々の人々に向かって謝罪することにより、毅然としてこの時代に対処し、「この曲がれる邪悪なる時代にありて神の取なき子」となり、「生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く」(ピリピ書二章一五節)き続ける力を備えられたいと祈らずにはいられません。

この告白を主なる神になし、同時に被害をうけた人々に謝罪することによって、明治学院が、キリストに在る真の平和を創り出して受けた罪を告白します。不当な日帝の強圧にキリストの十字架信仰で向き合うことが出来ず、日帝神社に頭をたれた恥ずかしい罪を痛切な思いをもって悔い改めます。

2. 日帝の侵略戦争に協力した罪を悔い改めます。

私たちは教会の財産を国防献金、愛国運動基金献金という名前で日帝の侵略戦争遂行に捧げた罪を自ら告白し悔い改めます。国民総力の名の下で日帝の軍国主義理念を宣伝して、日帝の戦争物資挑発にも加担した罪を悔い改めます。日帝軍国主義の手先に転落し、若者たちを死地に追いやった罪悪に対して、民族の歴史の前に頭をたれ謝罪します。日帝植民地時に私たちの民族が神の教会に託した期待と望みに応えることが出来ず、かえって日帝に屈服し協力した姿を見せることによって、民族の心にとても深い傷を残した私たちの罪悪に対しても一度頭をたれて許しを請います。

3. 神社参拝と日帝への協力の罪を懺悔し、清算できなかった罪を悔い改めます。

私たちは解放後、神社参拝に屈服した恥ずかしい過去を清算できず、回避しました。これによって神社参拝の罪悪を悔い改めて聖なる教会へ新しく生まれ変わることを主張する兄弟たちと分裂しました。神社参拝の罪を悔い改めない私たちの我執と頑なな悪のために、主の体である教会を分裂させた責任が私たちにもあることを痛感します。私たちは神社参拝のために分かれた兄弟姉妹に、悔い改めを拒否した私たちの過ちに対して赦しを請い和解と協力の手を差し出します。

私たちは教会が再び神と民族の歴史の前に恥ずかしい過誤を犯さないように、私たち自身の恥さらしの罪悪を記憶し、歴史の教訓

いくことに一層努力していくことができますように。

主一九九五年六月 日本国の敗戦五〇周年にあたって

明治学院 学院長 中山弘正

(4) 「神社参拝はか日帝への協力に対する罪責告白宣言文」

韓国基督教長老会は、1907年平壤(ピョンヤン)で起きた霊的大覚醒復興運動と、李儁(イ・ジュン)烈士をはじめとした大勢のキリスト教徒によって主導されたハーグ特使事件100周年である2007年を迎え、日帝植民地時に神と民族の前で私たちが犯した罪に対して痛切な思いをもって悔い改めます。私たちはあまりにも長い間私たちの過ちを認めず、懺悔する責任を回避してきたことを告白します。

教会の誠の覚醒と復興は、過ぎ去った日の罪に対する悔い改めに始まることを信じます。したがって今日、私たちの罪責告白文を通して、私たち自身を含めこの地の全ての教会とキリスト者に新しい霊的覚醒と復興の恩寵が与えられることを望みます。

1. 神社参拝の罪を悔い改めます。

私たちは日帝植民地時に日本帝国主義者たちの強圧に勝てず、教会が当然守らなければならない信仰の貞節と良心を守ることが出来ず、神社参拝に加担しました。私たちは神社参拝を宗教行為ではないという日帝の偽りの論理を受容し、信徒たちを欺き信仰と良心にそむきました。神に捧げる神聖な礼拝の中に神棚への黙禱、宮城遙拝、皇国臣民の誓詞朗読などいわゆる日本式国民儀礼を入れて、聖なる三位一体の神の名を辱め、偶像に仕えました。そして牧師たちの修練会で日帝の始祖神である天照大神の名前で「神道の儀礼」

として長く大切にしています。信仰と良心の自由、民族自主の精神をもって出発した韓国基督教長老会は、いかなる不義と暴力にも屈服せず、神の言葉を永遠の真理として宣布しながら韓国教会の改革と正しい成長、そして新しい時代を迎えるための和解、平和宣教に積極的に先頭に立っていきます。

慈悲深い主よ、過去の私たちの罪悪を寛大に赦してください、100年前この地の教会の上に降された聖霊をもつ一度この地の全ての教会と信徒の心に注いでくださることをひれ伏して願います。

2007年9月13日

韓国基督教長老会総会 総会長イム・シヨング並びに総会員一同

(北支区国際宣教協力委員会訳)

(5) 新日本建設についての宣言

賀川豊彦を中心に計画された1946年6月9日の全国基督教大会の直前の二日間、第二回日本基督教団総会が開催された。議長は富田満から小崎道雄に交代したが、役員・常議員の顔触れは、富田をはじめ戦時下指導者がほとんどそのまま残った。総会一日目の「伝道計画の件」で「新日本建設基督運動」が提案され、満場一致で可決。二日目に全国基督教大会での宣言文・決議文を可決。しかし、翌日の全国基督教大会で小崎教団議長が読み上げたものは、決議部分は総会で可決されたものとほぼ同じだが、宣言文は冒頭部分を始め、かなり修正されたものであった。しかし、誰が、どのような理由で修正したかは不明。総会での可決文と大会での宣言文は以下の通り。

宣言

我等ハ平和ノ福音ヲ信奉スル基督者トシテ灰塵ニ帰シタル帝都ニ立チ今更ノ如ク自己ノ使命ニ対スル不信ト怠慢トノ罪ヲ痛感シ神ト人トノ前ニ深甚ナル懺悔ヲ表明スル者ナリ。

今ヤ終戦十ヶ月筆舌ニツクシ難キ戦禍ハ益々深刻ヲ加ヘ苦難ト欠乏トノ沈痛ナル叫ビ全土ニ充テリ。而モ道義人心ノ荒廢ハソノ止マル処知ラズ、国家滅亡ノ危機將ニ迫レルヲ見ル。之ヲ救フモノハ基督ノ十字架ノ外ナシ之ヲ新ニスルモノハ聖靈ノ恩化ノ外ナシ。我等福音ヲユダネラレタル者此秋ニシテ立タズンバ何レノ日ニカソノ使命ヲ果ス事ヲ得ン。

我等ハ(三十万)日本全国基督教者ヲ代表シ新ナル献身ト結束トヲ誓ヒテ十字架ヲ基底トセル新日本ヲ建設シ以テ真ノ道義的世界秩序ノ実現ニ貢献セン事ヲ期シ茲ニ左ノ綱領ニヨリ三年計画新日本建設キリスト運動ヲ展開セントス。

決議

- 一、我等ハキリストノ福音ニヨル日本教化ヲ期ス。
- 二、我等は全力ヲ尽シテ餓死ニ瀕シツツアル八千万同胞ノ救援ニ努力セン事ヲ期ス。
- 三、我等ハ苦難ノ中ニモ男女ノ純潔ヲ保全シ道義ヲ高揚ス。

右宣言ス

昭和二十一年六月九日

全日本キリスト教大会

全国基督教大会宣言文

我等日本国民は、今次大戦に対する責任を痛感する。特に平和の福音を信奉する基督教信徒として、深刻なる反省と懺悔の悔改を表白するものである。無限に赦し給う天の父は、その豊かなる恩寵を

以つて、我等に再生起死の途を開き給うことを確信する。然し筆舌に尽し難き戦禍の現実を直視し、惨憺たる同胞の苦悩を見ては、新しき十字架の我等を待ちつつあることを意識するものである。

ここにおいて我等は、キリストの十字架を基底とする新日本を建設し、以つて真の道義的世界秩序を実現せんことを決意する。敢て聖霊降臨日をトシテ開かれたる本会を機として、全日本の基督的教化と、キリストによる信仰復興と、キリストの教会の拡大強化を祈るものである。これは我等に、全日本キリスト教徒の団結により、国民の苦悩を我等の身に負い。飢饉に、昏迷に、窮乏に、悲嘆に、身を挺して国民に奉仕せんことを期す。依つて新日本建設キリスト運動三カ年計画をここに展開せんとするものである。右、宣言す。

決議

- 一、我等はキリストの福音による日本教化を期す。
- 一、我等は全力を尽して餓死に瀕しつつある八千万同胞の救援に努力せんことを期す。
- 一、我等は苦難の中に男女の純潔を保全し、道義の昂揚を期す。

昭和二十一年六月九日

全日本キリスト教大会

(6) 信濃町教会の朝鮮からの神学留学生

この他に、ムン・ドンファン(文東煥)、コウ・トツキ(孔徳貴)、朴永出など。(『月報』2008年1月号「韓国の神学生たち」秋山憲兄、『信濃町教会七十五史』165頁・365頁参照)

【2017年9月24日刊】